

平成 21 年 5 月 29 日現在

研究種目：若手研究 (B)
 研究期間：2007～2008
 課題番号：19791653
 研究課題名 (和文) プリセプター教育支援プログラムの開発—プリセプターとしての経験知からのアプローチ
 研究課題名 (英文) Development of the preceptor education program.
 -Focus on the aspects of preceptors' experiences-
 研究代表者
 三谷 理恵 (MITANI RIE)
 神戸大学・大学院保健学研究科・助教
 研究者番号：70437440

研究成果の概要： 医療機関において新人看護師教育を担当しているプリセプターが、その役割を通して自ら成長していくために必要な教育支援に必要な要素をプリセプターの経験に焦点をあて検討した。プリセプターの経験を分析した結果、教育支援には自己の経験を学習化する能力の育成、自己の経験を可視化する機会の設定、プリセプティからの適切なフィードバックを得る機会の設定、プリセプターを支援できる人的資源の養成と職場環境の醸成の必要性が示唆された。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	600,000	0	600,000
2008 年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,000,000	120,000	1,120,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・基礎看護学

キーワード：プリセプターシップ・教育支援・経験知

1. 研究開始当初の背景

医療機関における新卒看護職員の職場定着の困難さ、すなわち早期離職の問題が取り上げられて久しい。新卒看護職員の職場適応には職場環境の整備とともに、新卒看護職員をサポートする人的資源の確保と質の向上が必要とされている。プリセプターシップはその対策のひとつとして 1980 年代後半より我が国に導入され、2004 年現在 85.6%の医療機関が採用している。しかし、プリセプターシップの運用においてはプリセプターへの

負担が指摘され、プリセプターへの支援体制の充実が求められている。特にプリセプター自身がこの役割を通して自らの成長につなげるためにはどのような教育的支援が必要かは十分明らかにされていない。そのため、プリセプター自身の経験から必要な教育支援を明らかにする必要があると考えた。

2. 研究の目的

本研究では、プリセプター役割を担う看護師の経験の様相を明らかにし、その結果から、

プリセプターに必要な教育支援プログラムを検討することである。

なお、本研究においてプリセプターとは、医療機関において一定期間、一名の新人看護師の教育を担当する先輩看護師とし、プリセプティは、プリセプターと同じ部署に所属する新人看護師と定義する。

3. 研究の方法

プリセプターシップを採用している医療機関でプリセプター役割を担った看護師に対してその経験に焦点を当て個別に半構成的面接を実施した。インタビュー内容は録音し、その後逐語録を作成した。逐語録を繰り返し検討しプリセプターの経験に焦点をあて、時間軸を意識しながらコードを作成。コードの類似性・相違性を検討し、比較を繰り返しながらサブカテゴリ・カテゴリを作成した。分析には、教育経験があり質的研究を行っている研究者にスーパーバイズを受け、分析結果の妥当性を検討した。

4. 研究成果

(1) 研究参加者の背景

プリセプターとして一年間プリセプティに継続的に関わりを持った12名を分析対象とした。所属する医療機関は、特定機能病院・私立総合病院・公立病院であった。研究参加者は自分自身もプリセプティとしての経験を有していた。初回プリセプターとしての経験は2年目から4年目の間であり、キャリア初期に該当した。

図1：研究参加者の背景

ID	経験年数	プリセプター経験回数	医療機関の属性
A	5年目	2回目	私立総合病院
B	5年目	2回目	特定機能病院
C	4年目	初回	特定機能病院
D	4年目	初回	私立総合病院
E	4年目	初回	特定機能病院
F	4年目	初回	特定機能病院
G	7年目	2回目	特定機能病院
H	4年目	初回	特定機能病院
I	4年目	初回	特定機能病院
J	5年目	初回	公立総合病院
K	4年目	2回目	私立総合病院
L	5年目	初回	私立総合病院

(2) プリセプティ及び周囲との関係の相互作用によって生じた経験プリセプターがプリセプティ及び周囲との相互関係によって生じた経験として【プリセプティとの適切な

関係の構築と調整を図る】【プリセプティに応じた関わり方の模索】【自らの体験の活用】

【プリセプティに対する評価を自分の評価として受け止める】【予測と現実とのかみあわなさへの直面】【サポートを使い分ける】

【自分自身への問い直し】【自分の指導の拙さと限界の自覚】【自分の看護師としての力量を問われる】【自分とは違うプリセプティの価値に触れる】【プリセプティからの肯定的なフィードバック】の11カテゴリが見出された。

プリセプターはプリセプティと出会い、プリセプティを知ろうと【プリセプティとの適切な関係の構築と調整を図る】ために行動していた。そしてプリセプティを尊重し、プリセプティの状況を見極めながら【プリセプティに応じた関わり方の模索】を繰り返していた。プリセプターは、自分のプリセプティとしての体験から、ある程度自分なりのプリセプター像を描いて役割を担っている。しかし、自分が予測している以上に「思ったように行動しないプリセプティ」やプリセプティからの退職の意思など「思いがけない告白」を受けるなどの【予測と現実とのかみあわなさへの直面】が生じていた。また、プリセプターはプリセプティを「自分が映る存在」として受け止めており、【プリセプティへの評価をプリセプターとしての評価として受け止める】ことにつながり、プリセプティに対する否定的な評価は自分を否定される感覚につながっていた。そのことが指導者である自分に必要以上にプレッシャーをかけ、自分の指導力の低さを感じるなど、自分自身に対しても【予測と現実とのかみあわなさへの直面】が生じていた。このようにプリセプターにとって指導役割を担う上で予測と現実とのかみあわなさは、時にプリセプティに対する苛立ちや自分自身の焦燥感の高まりにつながる要素として表現されており、プリセプターが指導役割を担う上で生じる困難さの背景として重要な点であることが示唆された。

指導方法の変更を明確に語った5名の指導方法の変更に至る過程(図1)を検討した結果、【予測と現実とのかみあわなさへの直面】を契機にこの状況を打開しようと自分が受けてきた教育などの【自らの体験の活用】をし、また【自分自身への問い直し】あるいは同僚や先輩、公的に提供される様々な【サポートを使い分ける】ことを通して、【自らの指導の拙さと限界の自覚】をしていた。このように自らを吟味することによってプリセプターは困難な状況を打開しようと試みていた。指導方法を変更するためには、プリセプター自身の吟味が重要であり、プリセプターが自分自身に対峙し状況打開のプロセスに至るには、プリセプター自身で自らをふり返し吟味しながら指導方法の変更への過程

を進む場合と、先輩や周囲のスタッフのサポートを通して自分自身への対峙が図られ、指導方法の変更に至る場合があった。そのため、プリセプターが指導方法を変更していく過程を支援するためには、プリセプター自身が感じている困難や思いを吐露できる組織環境の醸成と自分自身に対峙し、自らを振りかえるための周囲からの働きかけや、自ら経験を吟味し統合していけるプリセプター自身の能力の育成の必要性が示唆された。

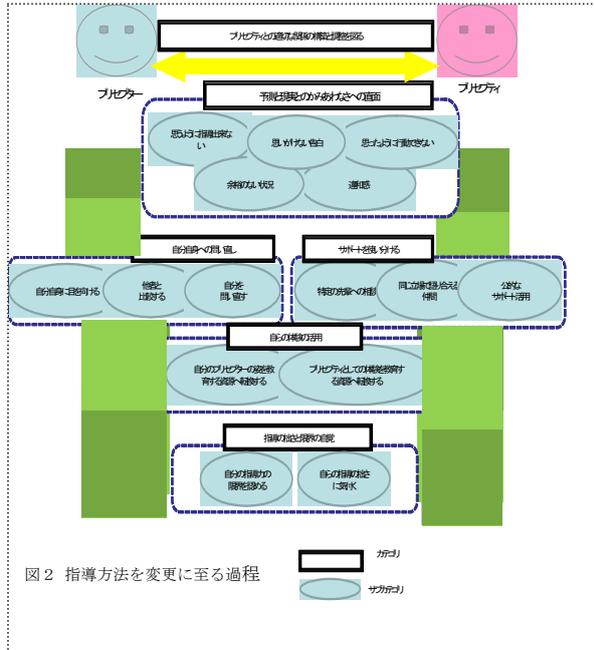


図2 指導方法を変更に至る過程

また、プリセプターはプリセプティとの関わりから「習慣化した自分の行動の意味を問われる」ことや看護実践に対して「手抜きしていた自分」に気づかされ、「自分のわからなさがはっきりする」など【自分の看護師としての力量を問われる】経験でもあり、【自分とは違う価値観に触れる】経験としてこれらの役割を担っていた。さらにプリセプティの成長した姿や、プリセプティから信頼されている実感などの【プリセプティからの肯定的なフィードバック】を受け止めることで、指導者としての役割を担っている自分自身への喜びにつながり、このことがプリセプターとしてプリセプティを指導する原動力や自分自身への承認につながっていた。

以上の結果からプリセプターが、指導役割を肯定的に受け止め自らの変化につなげていくためには、指導したプリセプティからのフィードバックを受ける機会を設定することも有用である可能性が示唆された。

(3) プリセプターが自覚した自らの変化

プリセプターは前述したプリセプティや周囲とのかかわりながらこの役割を通して自覚した変化として【指導者としての立場の自覚と指導するうえでの「構え」の変化】【自

分以外への周囲の関心の広がり】【看護観の自覚と看護師としての力量の向上】【自分自身への手応えの獲得】【後輩から学ぶ意義を見出す】という5カテゴリが見出された。

プリセプターは、プリセプティや周囲のスタッフとの相互作用から生じる経験を基盤としながら役割を担うことで教えてもらう立場から教える立場になったことへの責任と自覚を感じ、プリセプティの見方、指導上の構えを変えるとといった【指導者としての立場の自覚と指導するうえでの構えの変化】を自覚していた。また先輩から教えてもらうだけでなく、プリセプティからも学ぶ経験から【後輩から学ぶ意義を見出す】自分自身の学び方の変化を自覚していた。さらにプリセプターとしての経験はプリセプティや他のスタッフの動向に目を向けることにもつながり、担当するプリセプティに限らず他の後輩や師長、他のスタッフのプリセプティへの関わり方など周囲のスタッフへ関心を寄せ【自分以外の周囲への関心の広がり】にもつながっており、組織の一員としての成長が見出された。一方指導役割を担うことは、看護師として自らの態度や知識、技術を見つめ直し、自己の看護観を改めて考える【看護観の自覚と看護師としての力量の向上】の機会ともなっていた。また、プリセプティからの肯定的なフィードバックを得、指導役割を担え全うできた感覚は、自分自身の看護師としての成長を実感するとともに指導者としての【自分自身への手応えの獲得】につながり、自分に自信を持てる感覚を抱いていた。

以上の結果から、プリセプターを担う若手看護師にとって、プリセプターとしての経験は、組織内での自分の立場の変化を自覚し、視野を広げる機会でもあり、また自らの看護観を自覚し、看護師としての基盤を見つめ直し自己の看護実践の方向性を考える機会となっている可能性が示唆された。

(4) プリセプターへの教育的支援に必要な要素の検討

本研究の結果から、プリセプターが新人看護師教育担当者としての役割を担いなおかつ自ら看護師として成長を促進するためには、この役割を通して感じる困難な状況を打開し、自らの学びに変化させていく過程を支援することが重要である。そのためプリセプターには自分の経験していることを自ら振り返り、経験を統合させていくための能力が求められる。すなわちプリセプターが自己の経験を学習化する能力の育成を目指した研修の必要性が考えられる。プリセプターは初期の時期から指導上の困難や感じているため、これらの能力育成はプリセプター役割を担う前に行い事前の準備性を高めることが、スムーズな役割遂行につながると考える。さ

らにプリセプターは自分の経験している現象を言語化する機会を設定することがプリセプター自身の問題に対峙する支援につながると考える。そのため、プリセプターを経験している期間中は、プリセプターが自分の思いや経験している現象を言語化し、自らの経験を可視化できる機会を研修や部署単位でのサポート体制の中で実施することが必要である。しかしながら、自らの思いや困難さをプリセプター自身が自由に話せると感じられなければ、言語化する機会を設定しても効果的ではない。プリセプターが自らの経験を安心して表出できるための周囲環境の整備が重要である。すなわちプリセプターを支援できる周囲の人的環境の整備と、プリセプターがプリセプティとともに学び成長している組織風土の醸成が重要である。

またプリセプターがこの役割を通して疲弊するのではなく自らの成長の実感や承認を獲得するためには、上司及び周囲のスタッフからの承認も必要であるが、プリセプティからのフィードバックを受ける機会を設定し、ともに成長を実感できる機会の設定が必要であると考え。意図的にプリセプティからプリセプターへフィードバックする機会を設定することや、周囲がプリセプティの成長を認めることがひいてはプリセプター自身の自信や承認につながることを理解し、プリセプターを支援することが、プリセプターを担う看護師の負担感の軽減と同時に役割を担うことの意味を見出し、自らの成長の機会につながると考える。とりわけプリセプター役割を終了する段階ではお互いの成長を確認し、互いを承認できる機会を設定することが必要である。

(5) 本研究の成果の意義と今後の展望

本研究では、プリセプターの経験の様相を明らかにし、その経験が現在の看護師としての自分自身にいかに関与されているかを明らかにした。特に指導方法を変更していく過程の検討からは、その過程を促進するための支援について具体的な示唆を得ることができた。この成果は実際のプリセプターへの研修及び部署内での支援体制の構築に向けて活用することが可能である。また今回重要と考えた事前研修の段階からの自己の経験を学習化していく能力の育成を行うことは、指導者としてだけでなく、プリセプター役割を担う若手看護師の看護専門職者としての成長にもつながると考える。

一方、プリセプターへの上司からの承認の必要性はこれまでの先行研究でも求められてきていたが、担当したプリセプティからの承認がプリセプターへ与える影響についての示唆が得られた点が重要であり、この結果は実際の支援内容として今後活用すること

が可能であると考え。

本研究では、プリセプターの語る経験の様相からプリセプターへの教育的支援に必要な要素の検討を行い一定の成果を見出した。しかしながら、研究参加者数は12名と少なく、また医療機関の規模や研修内容の影響、プリセプターの経験回数・臨床看護師としての経験年数などがプリセプターとしての経験に与える影響を十分検討しているとは言えない。そのため、今後はさらに検討を重ねその経験の様相を明らかにするとともに、プリセプターの背景要因が与える影響についてもさらに検討を重ねていく必要がある。

また、今回見出された教育支援に必要な要素をプログラム化し、実際のプリセプターへの研修に活用し、そのプログラムを評価する必要がある。そのためには、さらに具体的かつ実現可能な研修プログラムを作成すること、医療機関との連携を図り、実際のプログラムを実施すること、実施したプログラムに対してプリセプター・プリセプティ及びプリセプターを支援する立場にある周囲のスタッフ、管理者などからプログラムに対する評価を得る必要がある。

さらにプリセプターを支援する立場にある人材の育成が今後重要であると考え。プリセプターをファシリテートできる人材育成に向けた能力の検討および研修プログラムを検討することも今後の課題である。

謝辞

本研究へご協力いただき貴重なプリセプターとしての経験につきましてお話いただいた看護師の皆様、ご協力いただきました医療機関の皆様に御礼申し上げます。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計 2 件)

① 三谷理恵 田村由美: 新人看護師教育の経験の中でプリセプターが指導方法を変更していくプロセスの検討. 日本看護学教育学会 2008. 8. 2-3. つくば国際会議場

② 三谷理恵 田村由美: プリセプター役割を経験することで自覚した自分自身の変化に関する検討 (投稿中) 日本看護学教育学会 2009. 9. 20-21. 日本赤十字北海道看護大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

三谷 理恵 (MITANI RIE)

神戸大学・大学院保健学研究科・助教

研究者番号：70437440

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者